

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	女の描ける畫の話 : 文苑
Author(s)	こなを
Citation	龍南會雜誌, 141: 43-53
Issue date	1911-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6227
Right	

女の描ける畫の話

こ　な　を

汚ない色によごんだ都會の空氣の中に生きて行くうち、そうした生活にありがちな悲しい經驗をどうしても舐めねばならなくなつた。もの惰い春の日永を、だらしない講師の唇からすべり出るレクチュアを聞いて居る間は、それでも感心にノートに書きとどめる事丈はかつ／＼して居たが、其中、皮膚の色が妙に汚ない蒼色に變つて、最う醜なごは腐つた様に他愛もない反撥力を失つたまゝに病は進行して居た。そうした病勢に代つた頃から、自分は何となく氣分が衰へて、狭い下宿の二階に、何度となく倦んだ様な欠呻を嚙んだ。其の日は再度評判して居たモデルが來ると言ふので、二三人の友達に威勢のある懸聲をしながら、往來を通して行つた。自分は晩方から寝たまゝの姿勢を少しも崩さずと、日の出る間の窓の色を凝つと眺めて何を思ふともなく、うつ／＼暗い心に氣持の佳い朝を床に過した。こんな事では最うとても苦心して漸う作つた、草稿や、未成品の塗り代へは出來まい、つけて行く感じの佳い線を見出す毎に、人知れず一切を透徹して藝術の縁線にでも觸れて行く様な氣のした心も、そうした事から不思議にすさんで最う、ブラッシュを握る勇氣もなくなつてしまつた。そんなものだるい心はそれから幾日か續いた、友達はいつも學校の退ける頃には時を違はす三階のドアを開いて入つてはホルマンハントの作品やフレラバイレストの藝術運動の批評などを狂觀的な調子で賑に話してきかした、女の曲線の話しや悲しい事に今度のモデルの鼻のどうしても茫漠として手の付け様の無つたと言ふ様な事や、伊太利彫刻の講義の力のあつた話などを、目の眩む様な速力で話して、どうして去つて行く。自分は友

達の後姿を靜に見送りながら、返す視線を、ついでは、やりあげた自畫像の方に向けて、あの幼象に取り卷かれた様な顔に、暫く無念の境に行くのが憚だつた。白馬會の方に出す印度神話の草稿は、此の近頃の感情の荒で、作品とはしないまゝに灰色の壁に立てかけてあつた。自分はそうして毎日床にありながら自己の技巧の拙なのを嘆せずには居られなかつた。其の中雨のひどく降りしきる日の夕方であつた偶然伊太利で死んだ、宗像の兄の處から重い手紙がやつて來た。そうして暫らく思ひ出さなかつた薄命な天才の一生の事などを思ひ出して自分が斯うしたうす暗い病に倒れて居る態を思ひ比べながら、忘れてゐた自分のプアーな記憶を恥じてなんとも言へぬ悲哀に打たれた。思ひ出すと宗像は未だ中學に居る時分であつた。どう思ひ出したか、兄や親の言に抗つて獨り一冊の詩集を懷にしてはる／＼東京にやつて來た。そうして自分と一處に千駄木の二階に住つて一生を藝術に生き様と誓つたものだ、西洋に飛んで行つたのは廿の時だつたと思ふ。自分はそれから何やかやと宗像の生涯やそれからそれを中心とした四周の事態などを回想して、降りしきる雨の夕を、薄暗く淋しく暮した。その後醫者のすゝめで自分は南國の故郷に歸る事にして、曙町の二階を捨て、三日目の晩方故郷の入江の畔を人力車に曳かれながら、疲れた眸の中に徂徠するシーンに有恨無恨の浪を打つて家の玄關に着いた。そうして誰でも經驗する様な遠く見て居る故郷の幻想と觸れて見たまゝの故郷との矛盾を、淋しく味つた。それでも澄み切つた空氣の中を微かな甘い春の享樂をなめながらも、すむに易い田園の中を自由に遊ぎまわつてる中病に衰へて居た氣分もいつの間にか消へてゐるのに氣がついた。家の座敷には宗像が向ふで描いたと言ふ彼の自畫像が懸つて居た、是は宗像の兄が十月の一週期の時に送つた者だと、父は教へて呉れた。宗像が伊太利に行く年に彼の兄は駒場を出て三年振をなつかしい故郷に歸つて來たのであつた。そうして、けな

げにも數年間の經驗を故郷に應用して、田舎には珍らしい立派な農場を作る様になつた、宗像の遺品は一週期を紀念として、農場の山手に起した小さな建築に、短かい天才の生涯を語る様に正しく列べられた。歸つてからの一週間計りは、それでも尙やるせなさの續が、ごく暗く煤けた天井にぶら垂つた蜘蛛の縷みたい、まだ自分の頭の裡をこしやくと取り乱して居た。自分は毎日家の裏手の丘に蒨ゆる若草を敷いては、もの足らん心に比較的、はつきりした四月の外光を柔らかに浴びながら、もつて來た物語りの詩集だのを讀んだり、讀みつかれたつづきを微かな夢に追つたりして、ぬけがらの様な生活の跡を描いた。茲からは海が光つてゐるのがよく見える。宗像がまだ村に居る頃はよく家の下の往還から照さんと吞氣な余韻を残して自分をよくをろんだものだ。宗像は内海でも毎に音戸を、ひごく愛した。そうして、何時だつたか茲に平相國の銅像をたてたい、そうして意匠は凡て自分でやつて見たいなど言つた事がある。ある時、音戸を渡つて島の人に此の話をした時、島の人が意匠にはきつと清盛公一人の像にして呉れるなど、謎の様な事を言つたと言つて笑つて話した。其時自分がそれは海女郎ごもつてろと言つたんだらうと、冷かすと黙つて聞いて居た。そんなわけで自分は此の丘に俯仰すると何時も、宗像の若い胸に蟠かまつて居た、狂觀的な、藝術の事を想ひ出す。彼の技巧は其思想よりも見劣りがしたけれども、其調子、色、そうして構圖等には甚だ智的に、研究する頭を持つて居た。外の美術家がまわりくどい研究に耽る時、彼は已に藝術の内面を掴むに鋭い眼をもつて居た。そうして當時既にゾラ、ドレツションを解き得て、其の作品にはきわどい處まで漕ぎつけて居る處がある。其の中彼は千駄木を捨て、突然俺は西洋に行くのだと言つた。その時は馬鹿騷位に思つて居たのが、實際になつて兄から許されたと言ふ報知を得た時などは、子供の様になつて白い齒を光らして居た。月日はそれから四年過ぎた。彼は南歐の到る

處を喰きまわつて、少しも歸る氣配は見せなかつた。或る夏ロゼチの畫などの復寫した立派な奴を送つて、其端にこま／＼と年來の考が書き記してあつた。彼は何故歸つて來んのだらうとは、同窓の誰彼がいつも口にする言葉であつた。然し其の時は自分は黙つて居た。其中、彼は作品と俱に歸つて來たがそれは悲しい白い骨に過ぎなかつた。……自分はそんな事を繰り返し／＼考へて、毎日々々丘の上に夢の様な命をつないで居た。四月の十九日、午後宗像の兄がやつて來た。宗像の兄は宗像と比べると、顔からして甚しい懸隔を見せた。來た晩は宗像の噂や、今度建てた遺品館や農場の話などを繰り返し／＼して、面白く笑はせた。

櫻は最う散り果て、しんみりした色調が、丘を中心／＼にめぐる四周を漂ふて居た。世は段々はでな光に包まれて行、小牧野の方の山々には薄い色の霞などが鮮に迷つて居た。自分は宗像の兄に連れられて此の晩春を思ふ存分、行きつまる處迄行く氣で宗像の農場に暮す事にした。農場の事務所は、丁度海岸山脈が緩かに海になだれ落ちる勾配を、再び逆にカーブを描いた丘の南向で、十八町の地べたを敷いた、廣い農場が一眸に見へる好適地であつた。自分は此の丘にいつもの如く、白毛布を敷いてやるせない心に、藤村の詩などを誦するのが好きだつた。嘗て友が姉様に貰つたのだと言つて、若菜集に緑色のリボンを挟んだのを持つて來ては此の詩人が歌を以て人生を論じんとした努力に、なにとぞ知れず幼ない自分達の心を動したのをさま／＼と記憶して居るが友は最う南歐に睡つて居るのだ、自分は其の昔、俱に踞して人生を語つた此の丘に憂愁の雲深い世を、觀ねばならん運命を想つて、ホロ／＼と涙を流した。助手の大井さんは毎日賑やかに事務所に通つた。初めの中は互に會釋する位であつたが段々馴れるに連れて、なにくれとなくしめ／＼語つて、丘から事務所の方に降りて行つた。大井さんは事務所のドアをあけて入るとすぐ二階のバルコニーに出て、二渡り農場を見まわし、

それから室に入るのがくせであつた、柔らかな春風は、さわ／＼とカーテンを揺つて居るけれども、事務所の中は閑として居た、石階の下には虞美人草などが咲き乱れて、事務所の褐色と、ものさびしい彩の中に逝く春を語つて居た。此の頃は農場も静なもので作人の影も余りない。それでも蔬菜園の方には村の娘や、かみさん達のそうぞうしい高笑が、暈した様に雑談にもつれて響いた。よく晴れた日が最う何日かつぶいて居た。

宗像の家は昔村の刀彌をして居たそうである。先代が中々の數寄者であつたので、家の建築なども随分凝つて居た。母屋と離れの間には村の小河をわざ／＼引いて、廣い泉水が藍色に湛へられてあつた。榎や杉などの自然林をかこんで、家を二分した様にしてあつた。自分は離れの二階の六疊を占領して、都會に居た續の仕事を思ひ出した様にして見た。自分の一生の仕事は「印度神話」である。宗像の兄は助手の大井さんや三島さんなど、一所に來ては賑に話した。彼は家にかつてる山羊を画いて呉れると何度も言つた。更けて行く夜など描きゆく木炭の微かな響の中にふと、足のしだれを感じ、起きなほつて見ると尙ほうす紫に燦れ上つた。なまゐるい脛を眺めて、氣分がくさ／＼して來る事も度々あつた。然し此の頃は太分肉の弾力性もしつかりして來て全快に間もない快感と、仕事のはかどりとと思はず、不自然な生活をする事も度々重なつた。此の頃は上絃の月があつた。晩方自分は田舎によくありがちな暮るゝ間の、暫らくひつそりした、シーンの中に溶け行つた森な思ひをして、夜と晝を接ぎゆく暈した灰色の中に、死んだ様な心に遠くの海を見て居た。

「照雄さあん、をりてらつしやい」と若い女が、そう言つて、向ふの槓の處に、顔のみ白くばかした様な姿に立つて居た。宗像の妹である。

「なんか面白いものでもありますか」と自分は軽く答へて女の方を見た。

「はい、今た産がありましたの、そしてね兄さんと大井さんがしごとをして居ます。」と云つて白い齒を心持よく見せた。

「秋さんの？」

「ホ、いゝわ。」

「そんなら姉さんの？」

「いゝね、山羊のね。早くいらつしやい、可愛いのが生れてゐますから。」とそう言ひ残して、いそ／＼森に消えた。自分は衝動的に欄を離れた。そうしてごと／＼と暗闇の階段を、座敷の椽端に出て見た。すす／＼杉の木の間に向ふをうすばんやりとした、カンテラの黄ろい灯が春の夜を溶け行く様に右から左に流れた。そうして其の濁つた波の端が、あた／＼かな笑聲となつて靜に響いた。自分は狐に化された様な氣持で、重たい足を引きずりながら母屋の壁をひを裏納屋に行つて見る。そこで白い兒を抱いたとなしそうな、山羊の連れ合を見て居る男や女の群に遇つた。宗像の兄は暫らくして自分の方に向いて言つた。

「のう照さん、まあ此の兒の顔を見い實に奇抜だ、よう／＼生れ落ちるとからすぐとぼけた顔のなる事だ。」とぼけた顔、うよりも、あんだあ、苦勞人らしい、ちう方がよかるう。」と大井さんが一寸間を入れた。

「苦勞人じゃない、苦勞山羊だらう」なごと又宗像の兄が訂正した、そうして其の續を皆んなして笑つた。

それから又私は獨りになつて離れの方に歸つて來た。部屋には最う灯がともされてあつた。宗像の兄と大井さんは夜業をするのだと仰山らしく言つて、事務所の方に出て行つた。海の方には尾ヶ崎の商船らしいのが、／＼と機關を鳴らして、陰氣な間に綠色の火を揺りながら海峡の方に上つてた。落ち潮の音だろ／＼微かな響

が呂律に連續して居た。秋さんな飯をつぎながら言ふ。「見て來ましたの？」

「ああ」

「ほんとに可愛い顔して居ましたでしょう」

自分は一寸黙つて鳥貝の柱をついて居た。女は反響がないのに落膽した様な面持で凝とランプの灯を見たが思ひ出した様に

「犬がふいにをそつて來ましてね、それから山羊も立腹して二人が喧嘩してたのです、その時の山羊の顔がほんとに可愛そうに描けてあります」と言つた。

「畫ですか」

「はい、その眼がうるんで如何にも間がぬけて居ましよう、それにああした口元で、びつくりをしてるのだからたまりませんわ」女は知らぬ顔で言ひつづける。「それにね、繪はそれつきりなのだから畫まで間がぬけて居ますでしよう、何故あんな變手古なのばかり畫いたのですかしら……ね、今宵山羊と犬の喧嘩を見せましようか」なご、獨りで心持よく黄色い火にばけた白い顔をはにかむ様にして言つた。それから自分は鳥貝の味のつゞきをばんやりと山羊の繪の感じにしながら、音もなく夕食をすました。女は華奢な髪を見せる様に七で起つた、顔が半分薄い影になつて居た。「十時頃にいらつしやいね、裏門の處で待つてますから」とそう言ひ残して襖の向に行つた。後は靜である、自分はめいつた様な遠い心にしみじみと中國海岸の晩春の情調を味つて居た。

「まつてましたの」

「いゝわ」

「あつ星が亡つた……静な晩ですね」。

「あゝ」

「こんな晩に兄さんはよく白瀧に行つて海の灯を見るのが好だと言つて居ました」

「あの青い灯は一時間も前からちつとこちらを亮て居るが、ありや何かしらん氣味の悪い火だ」

「あの嶋の岬の處でしょう？、さあ。星が海につかつてるのじやありませんかしら」。

「海の底の眞珠が光つてゐる様にもある」

「そう言へばあの浮島からは眞珠が澤山出ると言ふじやありませんか」

「アハハ……妙にロマンチックな事を言つたものだ。……あれから山羊先生はどうしました、悲しそゝに泣きつゞけてゐるのが聞へてたが」

「いわ、最う皆ねてしまいました」

「まさか睡むつても居まい」

「Yes」

女は燭臺を持つたまま前に立つた、暗い廊下を貫けてドアを開いた時黄色い灯影は靜に部屋に流れた。入つた所に青木君の『女』が金椽の中になつとこちらを瞰入つて居た。いつもより部屋が廣く見えて北壁にかけ

た「セーヌ河の畔」や「五月のアデンの港」などが夢の様な情調にゆらくと瞬いて居た、女は靜に南傍の三角棚に夢見て居る佛蘭西の子供の塑像に口吻して白魚の様な掌に頭をなせて居た。

「關門海峡を渡らんとて」と言ふ昔の作は依然壁に廣い影を流して淋しい色に妙に自分を深い瞑想に導いて行く、女はそうした時自分の傍にちつとよつて言つた。

「兄さんの描いた繪はどれを見ても鼓の音でも聞く時の様な感じのするものばかりでしょう」

「なせそんな事を言ふのですか」と自分は問ふて見た。

「間のぬけたものばかりでありますから……兄さんはね、いら／＼した新らしい色彩がきらひのですつて。

或る時佛蘭西の博物館で日本の鼓が陳列してあつたのを、一寸看守の目を盗んで、うつて見たらねその時代をくれの錆びた音がたまらず、懐かしく響きましたつて、それから其の音がいつまでも耳に残にてとうと繪まで間が抜け出して……それでも死んで逝つてはつまりませんわ。

「死んだのは仕方がない、節さんは藝術家のなすべき事は十分したのですから、つまらん一生を老びばれ行くのよりはどれ丈か幸福でしょう……」

「間の抜けた色を出すには、佛蘭西ではいかんと言書いてありました。昨年頃の葉書にね、それでも、一代のしくぢりであつたかもしれん、それとも幸福だつたのだらうか、それはしらんが自分は此の頃なにとなく國に歸りたくなつた、扇子に描いたり、襖にかいたりする日本の墨繪師はうらめしや……なぞと薄い墨がにじんであつて居ました、うらめしやと言ふ兄さんの心持が可愛そうでしょう。ね。それから此の方兄さんば大分墨繪もかいた様でした」。女はそう言つて黄色い灯をちつと見すまして居た。部屋はシンとする。そ

の中又「照雄さんのも最う直きですね」と何か思ひ出した様に自分を瞰て聞いた。其の時自分は帰るしゝ様な自分自身がなくなるとなく頼のならん男の様な羞恥を覺へて答ゆるには餘りに淋しく考へ過ぎて居た。何處かで夜中の鶏がなく。女は靜かに乱れた髪のはつれ毛を軽くかき上げながら燭臺をその九テンプンに揺へて、窓際のソファに倦るゝ姿をひねつて埋もらした。

「そう、山羊と犬の喧嘩を忘れて居ました」女は自分を見上げて微かに笑つた。三人の間には小さな金櫃が横はつた。女も言はぬ、自分も黙つてた、そうして其の間を春の夜は用捨もなく更け渡る。遠く落潮の音がして居た。其の中に燭は靜かに末期の光を投げて消れて逝つた。

「打ちやつて置いて下さい……」女は言ふ

「でも何も見へない」

「眼がなくては見へませんか？」

「あゝ」

「去年の秋の展覧會には盲人が見に行つて居ましたつけホ、」

「そんな藝當は僕には出來ない」

「でも私には出來ますから」

「そんならやつて御覽なさい」

「やつてたじやありませんの」

「何時？」

「山羊と犬の繪……」とそう聞かない位に言つてよほど自分に近い間隔に立つた。宵から情ない様な青い色にちつとこちらを見て居た島の灯は、よほど沖に遠かつて居た。海は暗かつた。

自分の話と言ふのは唯わけもない、之ぎりの事である、なんとなく馬鹿にされた様な、諷刺された様な、霧に鼻をつままれた態で其の後自分は再び都會の人となつて曙町の灰色な二階に毎日濃い油繪の具の香りに蒸せながら、ブラッシュを動かして生きた。女が見せた「山羊と犬」の繪は其れから今日まで寢室の壁にかけてある。夜明け方、ふと藍色のカーテンを洩れて射す朝の光に淡く見ゆる額の中にはベッドに埋もつた自分を凝視する女が居る、其の女は犬であると宗像の妹は教へた。女は其の後秋のサロンに出すのたと言つて中國の或る海岸を描いて居ると言ふ事が葉書の端にかいてあつた。其の葉書は宗像の兄からである。自分は相變らず一枚の繪に略一年間も費して居る。けれどもこうして居るのがなにとなくしんどい、いら／＼してならぬ心持のする事もある。

それから後畫會の連中が瀬戸内海を旅行した時宗像の遺品館を見て驚いた友達のと云ふ男が葉書に音戸の瀬戸をかけた空のコバルト色の處にくろい字で「仕事だ／＼、やつぱり仕事をせんに生れて來たのだ。最後の晚餐のみで佳い、ダギンチは居らんがそれで十分だ。天才のみが歴史をつくる……」などと走り書きがしてあつた。間には山羊と犬との暗い幻が浮ぶ、其の時は、あの女を端から端に彩^あをつけて、此の頃はあんなローマンチックに出來た女がなつかしくても、んな様な氣のする事もある。其の中自分の作品も塗り上げられるであらうとそれをたのみに毎日／＼精を出して居る。